

【やなぎだ くにお】

柳田国男

1875（明治8）年～

1962（昭和37）年

「日本民俗学の父」と言われた民俗学者であり、作家でもある。

少年時代からたいへんな読書家であった。

日本中をめぐり、各地に伝わる伝説など掘り起こした。

飯田には柳田家の墓があり何度も訪れているが、豊橋にも数回訪れている。



柳田国男
成城大学民俗学研究所所蔵

窮乏時代

柳田国男は、兵庫県の小さな村で3代にわたって医を家業とする松岡家で父操、母たけの六男として生まれた。父は医師、儒者、師範、宮司などを務めた立派な人であったが、家は貧しく、飢饉もあり 非常な貧困を経験した。13歳のとき、茨城県布川の地蔵堂で「間引きの絵馬」（貧しさゆえに自分の生んだばかりの子どもを殺さなければならない母親の姿を描いた絵馬）を見てショックを受け、このときの体験から、国男は「人々を貧しさから救いたい」という気持ちが強くなり、そのための勉強をしたいと考えようになったといわれている。



飯田市美術博物館内に移築された柳田館

医者となっていた二人の兄のところに身を寄せながら、第一高等学校、東京帝国大学法科大学政治科に進み、卒業後は農商務省農務局に勤務するようになった。そして、26歳のとき旧飯田藩士柳田家の養嗣子となることが決まった。

信州や三河にも

1897（明治31）年8月、国男は約1ヵ月間渥美半島の伊良湖岬に滞在した。9月上旬には、友人である田山花袋が訪ねてきて同宿したとされている。

このとき、椰子の実を見つけたことを東京に戻ってから島崎藤村に話したところ、藤村が大いに気に入り、それをもとに作られた詩が「椰子の実」である。（『海上の道』より）

また、伊良湖で見聞したことを「伊勢の海の清き渚に遊び、類無き夕風夕月夜の風情を身に泌め、物悲しき千鳥の馨に和して、遠き代の物語の中に辿り入らんとすれば、三河の伊良湖岬に増したる處は無かるべし。」で始まる『遊海島記』に詳細に記している。

この頃、東京の五番町快樂亭で開かれていた文学



伊良湖岬にある島崎藤村、柳田国男共作ともいわれる「椰子の実」の詩碑

会などに、小栗風葉や田山花袋らが出席していて交流があり、特に田山花袋とは親交が深かった。

農商務省の役人だった国男は、精力的に日本各地を講演旅行などで回っているが、その数はおよそ 120 回にも及ぶとされ、特に信州は柳田家の地元でもあるため、たびたび（20 数回）訪れている。その中で、南信州や三河を訪れた主な抜粋が下表である。

- ・ 1901（明治 34）年、長野県へ約 40 日間の講演旅行、このとき飯田では産業組合に関する講演を行う。180 名の聴衆が参加するほどの盛況であった。
- ・ 1905（明治 38）年、愛知県下を旅行し、水利組合を見てまわった。三河から遠江、引佐郡、磐田郡、安倍郡を回る。
- ・ 1920（大正 9）年、島田、掛川を経て三ヶ日、豊橋、名古屋などを旅行する。
- ・ 1926（大正 15）年、新野の盆踊りを見学する。
- ・ 1930（昭和 5）年、北設楽郡本郷町中在家の花祭りの実演を見学する。
- ・ 1933（昭和 8）年、豊橋市の狭間小学校で「地名と歴史」を講演する。
- ・ 1934（昭和 9）年、信州旅行の帰途、北設楽郡津具村の山崎宅へ泊まる。

国男は、『東國古道記』の中の「遠江と信濃との連絡」「信州から出て来る路」「秋葉と遠山道」「天龍川峡谷への交通」などの章で、信州と近隣の地域を結んでいた路について詳細に述べている。

国男は、実際にそこへ出かけていき。見聞したことや資料をひも解いてわかったことなどをもとに、その路の果たしていた役割や意義などについて考究している。

また『信州随筆』の中で、信州が「信濃柿」や「信濃桜」をはじめ信仰や民間文芸など、全国への輸出元であると述べている。また「新野の盆踊」についても「新野の盆踊の目立った特色は、扇を盛んに使うことと、太鼓その他の楽



『定本柳田国男集第二十二巻』
柳田国男／著 筑摩書房／発行

器類を、ちっとも用いないことであつた。」など国男がその場で体験してわかったことが詳細に記されている。

代 表 作 品

著 書 名	刊 行 年
近世奇談全集	1903（明治 36）年
萩の古枝	1905（明治 38）年
遠野物語	1910（明治 43）年
雪国の春	1928（昭和 3）年
遊海島記	1930（昭和 5）年
秋風帖	1932（昭和 7）年
東國古道記	1952（昭和 27）年
故郷 70 年	1958（昭和 33）年
定本柳田国男集	1961（昭和 36）年 ～
海上の道	同上

膨大な数の著作物

『定本柳田国男集』全 31 巻には、470 を超える著作が収められており、一生涯にいかにも多くの著作を発表したかが窺われる。その業績は、これら数多くの著作から日本民俗学への理論や方法論を提示し、初めて学問として確立させたことである。

なかでも、「此話はすべて遠野の人佐々木鏡石君より聞きたり。昨明治四十二年の二月頃より始めて夜分折々訪ね来り此話をせられしを筆記せしなり。」で始まる遠野物語は、柳田国男の代表的な作品となっている。